

「ヤグラタケ (3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「ヤグラタケ」は、クロハツ (またはクロハツモドキ) という別の菌類のみに依存し、その子実体の残骸を分解して自分自身を成長させている。



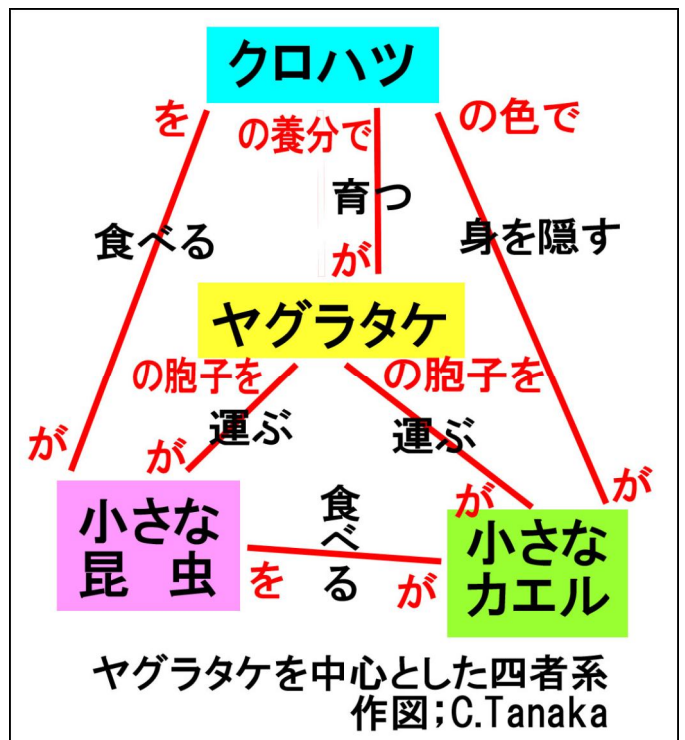
写真は、成熟したヤグラタケである。成長し切っても、傘の直径はせいぜい 2cm 程度で、小型菌に入るだろう。まるで子実体全体に「きな粉」をまぶしたような姿である。この粉状の物体こそが、胞子なのである。



「自然物の形状やふるまい」には必ず理由がある。私は上の写真の様子にそのヒントを得た。よく見ると、この写真の中央付近に、実は小さなカエルがいる。不思議なことに、ヤグラタケのそばには、小さなカエルがいることが多い。カエルはキノコを食べない。腐りかけたキノコに来る「キノコバエ」などの小さな昆虫を狙っているのだ。恐らくカエルも、胞子運搬者の一員なのだろう。クロハツ~ヤグラタケ~キノコバエ~カエルという「四者系」を形成しているのだ。



(ヤグラタケの近くで虫を待つカエルの拡大写真)



普通のキノコ---たとえば「シイタケ」は、傘の裏側の「ヒダ」に「担子器」と呼ばれる突起を形成し、そこに胞子を作る。ヤグラタケの傘の裏にもヒダはあるが、そこでも胞子は作られているのだろうか？